

紫禁城の夜明け

— 小説「韃靼漂流記」 —

☆ほしひかる(エッセイスト、江戸ソバリエ認定委員長)

2010年春のサンフランシスコ行にもご一緒した江戸ソバリエのマダム節子さん(日本橋そばの会主宰)から、「中国の承德へ蕎麦を食べに行きませんか」とのお誘いをいただいた。BSテレビで放映していた《中国麺ロードに行く ～ 皇帝の麺を求めて》に触発されての企画だという。偶々、私もその番組の再放送を見ていたので、すぐに参加の申し込みをさせていただいた。

旅行は、承德1泊、北京3泊(2011年9月9日～13日)。そのうちの承德の蕎麦については別に報告するとして、北京の歴史において前々から気になっていることがあった。それは『韃靼漂流記』である。

どういう話かというと、徳川3代将軍家光の代に越前の商船が嵐に遭って日本海を漂流し、その結果乗組員が北京に連行された事件である。

その報告書『韃靼漂流記』の中に、われわれ蕎麦好きにとって大変興味深い記事が書かれてある。それは、彼らに与えられた食糧の中に**蕎麦粉**があったことである。

連行された一行が北京に入った1644年というのは、満州人が立てた清国の3代皇帝順治帝のときだったが、漂流民たちに与えられた食糧に蕎麦粉が入っていたという報告から、**I. 清国初期の人たちが蕎麦粉を何らかの形で食べていたことがわかる**。しかし、**満州人=清国人が蕎麦を粉モノとして食べていたのか、麺として食べていたのか**は、この記録から判断できないのが残念だ。

ただ、上述の《中国麺ロードに行く ～ 皇帝の麺を求めて》によれば、中国北部の承德の住人が蕎麦を打ち始めたのは第4代康熙帝(在位：1662-1722)のころだということから、3代皇帝順治帝の代でも中国北部の人は蕎麦麺を食べていたことはまちがいないだろう。

II. 一方の、蕎麦粉を与えられた側の漂流民たちも、それを粉モノとして食べたのか、麺として食べたのか、記録からは分からない。

わが国の蕎麦切の初見は1574年(織田信長の時代)、そして江戸蕎麦切の初見は1614年(徳川2代将軍秀忠の時代)である。史料によると、いずれも祝事や寺院というハイレベルな空間での食事だったようである。したがって1644年に漂流したような船乗り=一般人が普通に蕎麦切を食べたいかどうかは、疑問である。

そんなこともふくめて、その時代の日中のことをあれこれ考えているうちに下記のような拙い文ができあがってしまった。

その駄文に題名を付けるとき、舞台はちょうど**清朝の初めのとき**であることから、題名も『紫禁城の夜明け』と意気がって付けてみた。加えて、**満州人が北京に入城したのも朝陽門であり、まさに朝陽輝く夜明けの門**であった。それはわれわれが泊まったホテルの近くでもあったが……。

そういえば、映画『ラストエンペラー』でも登場したR.F. ジョンストンの著書に『紫禁城の黄昏』というのがあった。それは逆に清朝最後の皇帝についての物語であったことを思い出した……。

《衷心感謝》

マダム節子様(江戸ソバリエ、日本橋そばの会主催)、寺西恭子様(江戸ソバリエ講師)、木村佐江子様(江戸ソバリエ)、土屋博一様(江戸ソバリエ)、日本橋そばの会の皆様、李先生と中国語教室の皆様、

☆日本船漂流

ウラ(オレ)は、越前、新保村の**卯助**と申します。ウラたちが乗った船が嵐に遭うて異国に漂着し、北京という遠い都に連行されてしまいました。大変な体験をしたものですが、多くの人たちの手助けによって、こうして無事に日本に帰ってまいりました。これから、その一部始終をお話したいと思います。ただウラはまだ15歳の若輩者でございまして、物事がよく分かっていないのでございます。その点は何卒ご勘弁願いたいと思います。

事の始まりは1644年(寛永21年)の4月1日、江戸は3代将軍**徳川家光**様の御代、越前福井は3代藩主**松平忠昌**様のころでございました。

ウラたちは3艘の廻船に分乗して、越前三国湊を出帆したのでございます。

三国湊というのは、福井藩唯一の外港として独占的權益が与えられておりまして、福井藩、丸岡藩をはじめとした越前諸藩の物資の集散地として繁栄してございました。ですから三国には、豪商がたくさんおったのでございます。

ウラたちが乗ったのも三国湊の**鶴屋**様の船でして、頭の**竹内藤右衛門**様以下58人が商いのために蝦夷地の松前に向けての船出でした。

最初は海路も順調で、5月10日ごろ佐渡島を出帆しましたが、晩になりましたら急変し、南からの大風に襲われて、それはそれは大変な大揺れで天と地が引っくり返るかと思っただくらいでした。風は明け方になっておさまりましたが、ウラたちの船は帆をやられ、海上を漂流するはめに陥ったのでございます。6月1日ごろでしょうか、船は日本海の北岸に漂着し、そこに10日余り滞留して、柱、船底の破損を修理し、15日ごろ日本に向かって出帆しましたが、夜からまたまた大風に遭って、日本海の北のポシエツ湾辺りの海岸に押し戻されてしまったのです。二晩続けての災難にはほんとうに困りはててしまいましたが、奇蹟的に3艘の船は離れずに寄り添っていました。

そのときです。ウラたちの船に土人たちが小舟でやって来て、身振り、手振りで立派な高麗人参を見せながら、「畑にたくさん栽培しているから見に来い」というのです。それも人のよさそうな男がニコニコして誘うのです。

大旦那(竹内藤右衛門)様は覇気のある方でございます。このまま帰れば鶴屋様に大損させてしまいますから、一発勝負するようなお気持ちがあったのでしょうか。土人の話にのってしまったのでございます。

そこで大旦那様はじめ43人は土人の案内で畑を見に行くことになりました。その中に若旦那(竹内藤右衛門の息子**藤蔵**)様も入ってございました。ウラは若旦那様の召使をやっておったのでございます。留守番は一艘に5人ずつ残ってございました。名前を申し上げますと、副頭の**国田兵右衛門**様、船問屋**小山屋**様の弟**宇野与三郎**様、それに船乗りの**藤十郎**さん、**彦作**さん、**十蔵**さん、**蔵兵衛**さん、**庄三郎**さん、**五兵衛**さん、**市三郎**さん、**長四郎**さん、

久次郎さん、庄吉さん、次郎さん、孫十郎さんとウラの15人でございました。

一晩が経ちました。ウラたちは心配していましたが、一方ではあの大旦那様に滅多なこととはあるまいと安心もしていました。昼ごろになった時のことです。辺りに血の臭いがしたような気がしました。するとそこへいきなり矢が飛んできて、何本かは甲板に突差さりました。ウラたちは警戒しながら浜を見ますと、昨日の土人たちが武装して、何か喚んでいます。そして、もっと驚いたことには、何と！ 大旦那様の、ク、首が浜辺に転がっているではありませんか。

大旦那様の無惨な姿を見て、ウラをはじめ何人かの者は腰を抜かしてしまいました。土人たちといえば、激しい身振りで何か命令しています。恐らく「殺されたくなかったら、大人しく船から下りろ！」とでも云っていたのだらうと思います。ウラたちも刀の何本かぐらいは備えておりましたが、奴らには弓矢がありました。人数もこちらの倍はおりましたので、逆らうことはできないようです。大旦那様たちは騙されて、考えたくはありませんでしたが、恐らく全員殺されてしまったのかもしれない。そのことを示すために、奴らは大旦那様の首を持ってきたのだと思います。若旦那様の方は新保村に2歳になったばかりの男の児がいるというのに、何ということでしょう。そんなことを思いながら、ウラたちは船から下りました。すぐに兵右衛門様が「せめて藤右衛門様の首だけは丁重に葬らせてくれ」と頼みましたが、言葉が通じません。そればかりか、奴らは兵右衛門様を鉄のような棒で殴ると丘の上の方に引き摺って行こうとします。もしかしたら、兵右衛門様までもが首を落とされるのかもしれない。驚いて、与三郎様が必死になって「助けてくれ！」と懇願しました。そのためか、奴らは兵右衛門様から手を離しました。その間、ウラは砂浜を這って、こっそりと大旦那様の髪を切り、せめて遺髪にしようと懐に忍ばせました。ウラがまだ子供だったからか、奴らもあまりウラのことは気にしていなかったようでございます。ウラは大旦那様や若旦那のことも思いながら、口の中で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と唱えておりました。それから、ウラたちは縄で繋がれ、奴らの部落へ連れていかれました。もちろん、船や積荷は分捕られたのでございます。

部落に着きましたら、ウラたちは牛や馬のように扱使われました。ウラたちは、あの夜に別れた43人のうち1人でもええから助かって、生き残っていてほしいと願いながら、命令されるままにきつい仕事をさせられていました。

そのうちに「異国人がいる」との噂が伝わったのでしょうか。隣の部落の者までもがウラたちを見物にくる始末でございます。

それを見た兵右衛門様は、「この状況じゃ、迂濶にわしらを殺すわけにはいかんじゃろう」と申されておりました。だからというてまだ安心はできません。もしも、もしも機会があつて逃げ出したとしても、異国のことゆえどっちへ行ったらええのか、サッパリ見当もつかんのです。

ウラは兵右衛門様と与三郎様に、大旦那様の遺髪のことをこっそりお話ししました。

すると、兵右衛門様は「ようやってくれた。ワシらは藤右衛門様ら殺された者たちに合わせる顔がない。日本に帰れるようじゃったら、その遺髪をご遺族に渡さなきゃならん。もし帰れなかったときは、この地に篤く葬ろうぞ」とおっしゃってくださいました。

そうこうして一か月も経ったころでしょうか。この国のお役人が数名やって来たのでご

ざいます。おそらく、ウラたち日本人がいることが都まで伝わり、お役人が検めにやって来たのでしょう。ウラたちはどうなることかと緊張しておりました。ところが、そのお役人様は部落の長を叱り飛ばしたのでございます。部落の長は土下座していました。

「これで助かったかな」と兵右衛門様が言いました。

たぶん、この部落の者はウラたちを襲ったことを、ウラたちの村でいえば、福井のお城のお役人様に報告しないで、ウラたちの荷を勝手に盗ったのでございましょう。翌日、お役人様たちがさらに増え、そして部落の長は鞭で打たれたのです。部落は大変な騒ぎになりました。規則を破った者に対する罰だったのかもしれませんが。この国は厳しい国だと思いました。

それからウラたちはこの国の都、盛京(現：瀋陽市)とかいう所に連れて行かれることになったのでございます。

お役人様に護衛されて、きつい山路を一か月以上も馬に乗ったり歩いたり野宿したりを続けました。一行の中には土人の長も入っておりましたが、ウラたちは縄で縛られてはおりませんでした。お役人様たちの態度もわるくはありませんでした。途中、松林も抜けました。ただの原っぱも通りました。ただ、日本のような水田が見られませんでした。後で聞いたのですが、ウラたちは長白山山脈という所を越えたのだといいます。「日本でいえば、加賀の白山ぐらいの高さじゃろう」と仲間の一人が言うておりました。

そして、とうとうウラたちは盛京に着いたのでございます。それは8月25日ごろではなかったかと思えます。三国湊を出てからもう5ヶ月です。

それにしても盛京という所は、何と慌ただしい都だろうと思えました。まるで火事場のように人々が荷物を持って走っているのです。

ウラたちは奉行所みたいな所へ連れて行かれました。お互いに言葉が通じません。兵右衛門様や与三郎様は、「もう天に任せるしかないやろう」と言うておりました。ところがです。取り調べの様子からみますと、奉行所のお役人は土人に対しては厳しい目付きで臨むのですが、ウラたちにはそうでもありませんでした。

兵右衛門様は「ははん。奴らは、日頃から悪さをしておったのじゃな」と見たのですが、安の定、土人の長は鞭で打たれる刑に処せられたのでございます。

ところで、ウラたちといえ、これから1ヶ月後に北京という都へ行かなければならなくなりましたが、その理由はよく分かりません。言葉は通じませんし、ウラたちは連行された身、多くは知らされないのです。

それまで少し日にちがありますので、盛京の都についてお話しておきたいと思えます。

その前に、ウラたちはこの国のことを「韃靼国」、この国の人たちを「韃靼人」とばかり言うておりましたが、本当の国名は「清国」、この国の人々は「満州人」というのだそうです。そしてこの国の皇帝は、初代はヌルハチ様、二代目がホンタイジ様、そして今は三代目の順治帝様だそうです。日本でいえば、天皇様か將軍様のような偉いお方です。

その皇帝様が住まわれている宮殿を「盛京宮闕」と呼ぶのだそうです。敷地面積は6万平方メートル。1625年に造営が始められ、つい5、6年前に完成したばかりらしいです。

どの屋根も緑色瑠璃瓦で縁どった黄色瑠璃瓦葺きでした。村のウラの家は藁葺きの屋根で話にもなりません、それにしても日本の建物とはえらく違うと思えました。先ず、大

清門という正門を行くと正殿がありました。四面には観音開きの出入口があります。その先に翔鳳楼。その奥の高台に周壁を巡らせた正宮があります。東側が皇帝様と皇后様の寝室だそうです。西側には皇帝様が祭天を行う神堂があります。西側の壁には神龕があって「関帝」とかいう神様が祀られています。祭天は朝祭、夕祭、日祭、季祭、節祭、大祭があって、「サマン」という巫女様が神歌を歌いながら舞い踊ることから始まるのだそうです。日本と似ていますが、次からがまったく違います。天の神様と関帝様を称え、生贄の黒豚、つまり猪に似た動物だそうです。それを竈で煮て、それを神龕に供えて、皇帝と臣下が共に分け合って食べるのだといいます。それを聞いて、ウラは何か吐きそうになりました。関帝様というのは、『三国志』に出てくる関羽様という英雄だそうです。日本でいえばヤマトタケル尊か、将門公か、義経公のように強い方なのでしょう。この国ではえらく尊敬されているということでした。東南の隅には「神杆」というものが立っていますが、その頂部に付いている錫斗に、先ほどの肉と米穀を混ぜたものをのせ、祖霊とされる鵲という鳥に喰わせるのだそうです。どこの国も神様は大切にされているもんだなと思いました。

宮殿の中心は「大殿」という建物です。近くに、この国の重臣だという「八旗」軍団の長が仕事をする「十王亭」がありました。日本でいえばご家老様が執務をする建物というところでしょう。

兵右衛門様は「全体は日本の城のようじゃが、日本の城より粗相だな」と呟いておりました。

こんな風に言いますと、だいぶ自由に歩いたように思われるかもしれませんが、「盛京宮闕」は少し観ただけです。後日、北京で親しくなった満州人の友だちに説明してもらって理解できたのです。

さてさて、ウラたちが北京へ行くという話ですが、盛京にウラたちが着いたとき、実はこの清国が大明国を破って、北京に遷都を行っている真っ最中だったのです。だから都の印象が火事場のようにならざるを得たのでございます。日本でいえば、都が京から江戸に移ったようなことでしょうかから、偶然のこととはいえ、ウラたちは歴史的事件の渦中に飛び込んだわけです。

ですから、その辺りの話はウラから申し上げるより、北京で仲好くなった清国のドニという若い衆の口から語ってもらうのが一番ええかと思います。

☆北京攻略

では、ここからは日本人の卯助さんに代わって、私が話します。

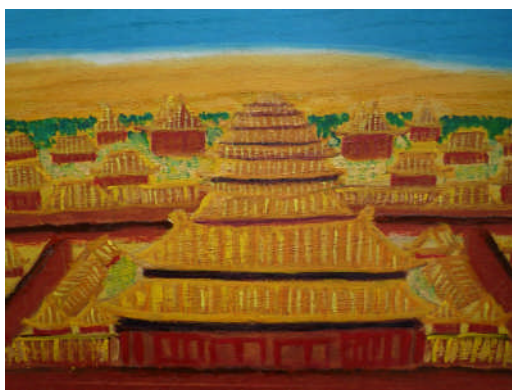
1643年に、清国2代目皇帝ホンタイジ様が急に亡くなりました。わが国は皇位をめぐる故ホンタイジ様の弟、つまり初代ヌルハチ様の第14王子ドルゴン様一派と、故ホンダイジ様の第1王子ホーグ様を支持する一派に分かれましたが、結局は清国が二分されることだけは避け、双方ともに皇位に就かないということで手を打ち、妥協案として正妃の王子であるプリン様(ホンダイジの第9王子)が、順治帝(在位1643-61)として3代目に就かれることになりました。

このドルゴン様という方が大変な方でございまして、あの方の知力は他を抜きん出ておられ、初代ヌルハチ汗様も後継者はホンダイジ様ではなくドルゴン様になさろうと思われていたそうですが、ヌルハチ様が亡くなられたとき、ドルゴン様がまだ若すぎたためホンダイジ様になったと伝えられているくらいであります。この度の皇位継承の運びにつきましても実はドルゴン様のお考え通りになったのでした。そんな風ですから、あの方の知力と実力には他の重臣たちも逆らえず、ドラゴン様が摂政王となって6歳の新帝を補佐することに全員が賛同されたのです。

さて、そのころの明王朝ですが、まさには風前の灯となっていました。これまでの帝国もそうでしたが、明国もまた定石通りに旱魃と宦官によって滅ぼうとしていました。旱魃で農民が貧困に陥っているにもかかわらず、宦官は権力を嵩にかけて私腹を肥やす。この格差構造に人民が不満をいだと、遅かれ早かれ反乱軍が生まれます。もちろんこのような状況は賢い方なら誰でもお分かりです。ですから、明王朝の**崇禎帝**様も当初は必死になって、改革に努められたと聞いています。しかし、万里の長城の西には反乱軍、北にはわれら清国が明国を突き崩そうとしています。その上、最大の敵である宦官が足下にいます。彼らは、表面では皇帝に平伏してはいますが、腹の中ではいつも自分の利を守るための抵抗策を練っているのです。その宦官たちに崇禎帝様もとうとう根負けして政治を投げ出されておしまいになられたのです。

どうしてそのようなことになってしまうのか、わが王ドルゴン様は「国王と役人のちがいについて」、このように、お話なされたことがございます。

「国王の天命は国民を守ること。そのために国をつくる。そうしてでき上った国を守るのが役人の仕事。また、そういう事務官がいなければ国の運営はやっていけない。しかし、その役人が国のために尽せば尽すほど自分たちがやっていることが絶対正しいという考えをいやくようになる。矛盾だが、そうすると仕組の維持にやっきになって、国民の姿が見えなくなる。それを正すのが、国王である。しかし、こうしたことに宦官が携わった場合は始末が悪い。性を奪われた奴らはその分、権力と贅沢さを求める。そこに賄賂の芽が出てくる。一ヶ所腐れば、もうとまらない。広がっていくのみだ」と。



【万歳山から望む紫禁城 ☆ ほしひかる 絵】

そのようなとき、**李自成**という男が率いた農民の反乱軍 50 万人が北京城に怒濤となって雪崩込み、とうとう明王朝最後の皇帝・崇禎帝様は紫禁城の北にある万歳山で自殺されたの

です。それは1644年の3月のことでした。万歳山から南を眺めれば、紫禁城の金色の屋根が連なり、北京城が一望できます。恐らく、崇禎帝様はその光景を臉に焼き付けて、死を遂げられたのでしょう。崇禎帝様は死ぬ前に、衣服を裂いて襟の部分に遺言を書き残されたそうです。「私の遺骸は賊が切り刻むのに任せるが、一人の人民さえも傷つけないように」。

私は、最期まで民のことを思われていた崇禎帝様はたいへんご立派な方だと思います。

対する李自成は国を「大順」と名付け、自ら「皇帝」を名乗りました。その上、李は崇禎帝様のご遺体を見つけ出し、東華門外に放置したのです。

亡き帝の変わり果てたお姿を見て、道行く漢人たちは深く嘆き悲しんでいるというのに、宦官たちは平気な顔をして新しい皇帝・李自成を迎えたのです。

さすがの李も呆れて怒り、「その者たちの首を斬ってしまえ！」と狼のような声で吠えたそうです。李自成の容貌は普段から魁偉で、目は落ち窪んでいたそうですが、そのときの李はまことに怖ろし気な顔だったそうです。

とにかく、そんな具合で北京城は大混乱に陥りました。

ドルゴン様ですか。そうです、北京攻略はあのお方の念願でした。常々ドルゴン様はこう申されておりました。

「初代ヌルハチ汗は一族をまとめ後金国を建てた。それを二代ホンタイジ帝が清国とあらため、皇帝と称した。オレは明国を倒して、北京城を獲る。それが初代、二代の志を継ぐことだ」。

それなのに、北京は李自成によって抑えられてしまったのです。

ドルゴン様はさぞや悔しがっているかと思いきや、意外にも平然と笑っておられました。「明王朝が滅んでくれないことには、真の清王朝の成立はない。だから、李が明を亡ぼしてくれたのはありがたいことよ。わが軍の手間が省けた。しかし……」とドルゴン様は鋭い目付をして続けられました。「早いうちに李を討つこと。そして、絶対に呉と李を結びつけてはならぬ」。

呉という人物は、難攻不落といわれる山海関に居る明の守将**呉三桂**のことです。歳は30歳代、ドルゴン様と同じぐらい。李自成は40歳少し前。そういえば、亡き崇禎帝様もドルゴン様と同じ歳だったと思います。

北方の盛京にわがドルゴン様、北京には李自成。両軍の間に壁のような、山脈とその山頂に築かれた万里の長城がたちはだかっています。両者ともに大軍が巨大な壁を越えるのは困難です。唯一突破できるのが、平地にある山海関というわけですが、そこには明の遺臣呉三桂が構えています。まさに三傑の睨み合いです。

ドルゴン様は、「体制を立て直した李軍が呉軍と一つになって攻めて来る」という事態を最悪の状況として想定されておられるようです。それ故に逆の絵を描けばいいというわけです。それは、①李軍が体制を立て直さないうちに、②清国軍と呉軍が一つになって、北京の李軍を攻めることです。つまりは、早期のうちに李を北京から追い払う、というのがドルゴン様の戦略です。

対する北京の李自成はどう出るのでしょうか。勢いにのっている今、呉軍と戦うというのでしょうか、あるいは先にドルゴン様を攻めようというのでしょうか。それとも体制を固めてから挑もうというのでしょうか。

しかしドルゴン様は、北京に入った今の反乱軍に、もはや勢いはないと読んでおられました。都とは恐ろしい所です。旨い食べ物、酒、女がふんだんにあります。統制力のない寄せ集めの反乱軍はすでに規律が緩み、北京に雪崩込んできたときの勢いは鎮火したと判断されています。勢いとは怖いものです。それがあるときはまるで大雨のときの濁流のように自然に膨れ上がって流れを加速させていくのです。そうなると、訓練を受けた軍隊ですら手が出せません。だから、呉軍も、わがドルゴン様も李の北京入りを阻めなかったのです。ですが、勢いが消えたら単なる群れです。それが今の李軍だということです。ただし、やがては李もそこに気が付き体制の立て直しを図るでしょう。その前にドルゴン様は李を討たねばならぬというわけです。

また、山海関の呉三桂はどう出るのでしょうか。崇禎帝様の仇として李を討つべきと考えているのでしょうか、それとも長い間、敵対してきたわが清国と戦うというのでしょうか。いずれにしても呉は、わがドルゴン様と手を結ぶか、あるいは李と手を握るかの二者択一を迫られています。考えてみれば、おかしなものです。呉は両軍が咽喉から手が出るほどの重要な立場にあるというのに、決して主役ではなれないのです。どちらかを選択するしか生きる道はないのです。これが落ち目というものです。道があるとすれば、皇帝の遺族の誰かを担ぎ出すしかありません。しかし、山海関にいる呉にはそれも無理な話です。

もちろん李は、そういう呉に「味方に付け」との使者を出しているのでしょうか。

一方のわがドルゴン様といえば、兵を山海関付近まで繰り出させ、何と軍事演習を始めました。整列して、疾駆させ、弓矢、槍、剣、旗の立て方まで、それはそれは厳しく訓練されるのです。そして声高に「わが満州軍は太祖ヌルハチ様以来、万騎集まれば敵なしと恐れられた騎馬軍団ぞ。誇りをもて！」と叱咤されるのです。

私は「そうか」と今さらながら感心しました。見事に整列した軍隊を見れば、軍人はどう感じるのでしょうか。私は背中に戦慄が走りました。きっと呉三桂も同じだったと思います。その上でドルゴン様は、先に軍門に下っていた呉三桂の叔父**祖大寿**を使者として出し、「貴殿の息子の**呉応熊**にホンダイジの14王女**建寧公主**をやる」、つまり「わが陣営に付けば、王家一族として迎える」と申し出されたのです。

対する李は、これは後で聞いた話ですが、北京に住んでいた呉三桂の父**呉襄**と、三桂の愛妾**陳円円**を人質に取り、「味方になれ」と迫ってきていたそうです。円円というのは皇帝すらも欲しがった「傾城の美女」として知らぬ者はおりません。さぞや三桂は腹腸が煮繰返っていたことでしょう。そんな李とドルゴン様の品格の違いを思い知った呉三桂は、清国のドルゴン様に投降し、明の仇である李を討つための援軍を求めてきたのです。

戦わずして勝つ。そんな戦略がドルゴン様の頭の中にはあったのでしょうか。ですから、勝利の分岐点は呉次第と読み、真剣に呉獲得につとめられたのです。対する李にはドルゴン様のような真剣さがあったのでしょうか。私にはそうは思えませんでした。

ドルゴン様は、呉軍に味方の印として1万本ちかくの白い旗や幟を贈りました。戦いの最中には号令や命令はなかなか聞こえませんが、旗や幟で合図します。ですから、旗や

幟は武器とともに必要です。いや、それ以上に旗や幟が戦場にはためく壮観さは兵の士気を鼓舞します。その様が戦いを決することさえあります。

さて、いよいよ決戦の時です。

それは呉軍と李軍の衝突で始まりました。

ですが、戦いとは裏をかくことです。山海関から離れた所の長城を越えて、山海関の呉軍の背後に回ろうという作戦ぐらひは李自成も考えつくことでしょう。そこでドルゴン様はそのまた裏をかこうと、呉軍李軍衝突直前に、呉軍を残して、清国軍の騎馬隊は長城を越えられそうな口へと走ったのです。案の定、ドルゴン様が向かった一片石口には李軍の分隊が山を登って来ます。一足先に着いて待っていたドルゴン様の騎馬隊と必死になって登って来る敵。この僅かな差が勝敗を決めます。ドルゴン様の騎馬隊は一気に山を駆け下りて、敵を蹴散らし、すぐに全力疾走で山海関へ引き返されました。



【万里の長城 ☆ ほしひかる 絵】

丁度、山海関では呉軍と李軍の戦いの真っ最中でした、初めは呉軍が大砲を撃ちこみ有利だったのですが、李軍の兵の数は呉軍の数倍です。次第に劣勢になっていたところへドルゴン様の騎馬隊が戻ってきたのです。騎馬隊は李軍に向かって一直線に疾駆します。わが軍の騎兵の弾弓が唸って矢が放たれ、槍、剣、刀が唸りを上げて乱舞します。埃と火薬の匂いに塗れていた戦場は次第に血の臭いに染まってきます。なぜ、混乱する戦場で敵軍が判断できるかといいますと、そうです。旗と幟です。清国軍と呉軍は白い旗と幟を備えています。呉軍の両脇に降ってわいたように清国軍が加わると、辺りは白い旗と幟で埋め尽くされました。李軍から見れば、まるで大海原の白い荒波が押し寄せてくるようだったでしょう。その圧倒振りと凄さは戦場に立った者しか分かりません。旗と幟が武器以上の威力を発揮するのです。李軍の兵士は恐怖にかられますが、一旦恐怖心をもつと、白い旗や幟が、そして敵兵が実際より二倍、三倍にも見えてきます。そして何人かが逃げ出せば、それが濁流となって捌け口を探します。ドルゴン様は反乱軍が北京へ入って来た方角だけは攻めませんでした。当然、濁流はその方向へ流れて行きます。それは羊の群れを御する遊牧民族のやり方でした。結局、農民軍は北京に入ってきたときの万里の長城の居庸関へと向かい、そして元来た道を逃げ帰ったことになったのです。

わが清国は、倒れた明国の仇討ちをしたわけではありません。ドルゴン様の考えは「真の清王朝創立の前には明王朝は在ってはならない。その明を倒してくれたとは手間が省けた。後はオレたちがやるから、反乱軍とやらは北京から消えろ」というわけです。ですから、李自成を死刑にするとかは二の次なのです。実際、李も元の本拠地だった陝西へと一旦はうまく逃げたようですが、翌年農民によって殺されました。結局、李は40日しか君臨できなかったこととなります。

そういうわけで、勝利したドルゴン様は清の大軍を率いて北京城の東の朝陽門から紫禁城に乗り込まれました。5月2日のことでした。そうです。その名のごとく朝陽のように爽やかに、かつ威風堂々とです。紫禁城の新しい夜明けの時でした。

北京城という所は、内に皇城、さらに内には紫禁城を抱えています。さっそく、その皇城、紫禁城を守るようにわが国の「八旗」軍団が駐屯しました。つまりは正黄旗軍と鑲黄旗軍が北に、正白旗軍と鑲白旗軍が東に、正藍旗軍と鑲藍旗軍が南に、正紅旗軍と鑲紅旗軍が西です。

そして明朝に仕えた漢族の文官、武官をすべて明朝時代の待遇のまま留用する方針を出しました。あくまで、明朝を引き継ぐのだという大義を貫こうというのです。ただし漢人たちは城の宣武門外に出て住まうようにとの通告も出しました。4日には、自害した明朝最後の皇帝を悼み、官民あげて3日間、喪に服しました。その喪があけると、すぐに使者を孔子廟に送って孔子を祀り、儒家に代表される漢族の政治と文化を重んじる姿勢を鮮明に打ち出したのです。

その一方では、わが満州族の風習である、弁髪（べんぱつ）の徹底。これに従わない者は処罰されました。こうすることによって、清に従う者、従わない者を区分することができたのです。なにしろ、200万人もいないわが満州族が、それよりも遥かに数の多い、全土に1億数千万もいるという漢民族を中心とする諸民族を支配するのです。実際、強力な抵抗運動が発生しましたが、清軍が強いうちに、早めに叩いておく必要があるという考え方から、許せないことは一步も譲られませんでした。その一方で、ドルゴン様は肉体に加える刑罰は廃止しました。

どうです、ドルゴン様は飴と鞭の使い分けは見事でしょう。

ともかく、紫禁城は新たな夜明けを迎えたのです。そうです。北京の紫禁城は明と清の2王朝の政治権力の中核たる城になるわけです。そういうときに北京に滞在していた日本人が兵右衛門様や卯助さんだというわけです。

ここからは再び卯助さんに話してもらいましょうか。卯助さんもだいぶこの国の言葉が分かるようになりましたから。

☆紫禁城の夜明け

それほどでもありませんが、ウラは子供のころからつまらないことを覚えるのが得意でして、昨年若旦那様と蝦夷へご一緒させていただきましたときには多少のアイヌ語を覚えたりして、大旦那様に褒められたのでございます。そんな癖がこちらに来てからも出たのでしょうか、ほんの少しですが満州人や漢人の言葉を使えるようになったのです。そんな

ウラですが、「ウラ」という越前弁だけは癖になっているものですから、皆に笑われる始末でございます。

それから申し上げておきますが、最初の村で捕虜になっていたときはむろんのこと、盛京にいるときも、仲間の皆さんは口が堅かったのですが、北京に来てから喋るようになり、顔付も明るくなりましたので、よかったと思います。

マ、それはええとして、1644年9月に、清の3代皇帝順治帝様は北京に入られたのです。そしてウラたちも、北京に連れて行かれることになり、およそ1ヶ月後、つまり11月の初めに、順治帝様と同じ街道を歩いて北京に着きました。盛京と北京は35、6日ぐらいかかりました。

盛京から北京への街道は、順治帝様の御一行が通った直後だったからでしょうか、かなり整備されていて、平坦でした。その道中、北京に向かう満州族の役人やその家族たちの姿を、毎日のように見かけたのです。

また山海関では、山頂に延々と築かれている「万里の長城」を目にしました。「長城の長さは約6000kmだ」と清国のお役人様から教えられましたが、ピンとこないのです。その距離は何でも「九州博多から蝦夷の松前までを往復したよりもっとある」と与三郎様が教えてくれましたが、それを聞いてまたびっくりするやら、ますますピンとこないやら、とにかくこの国は凄い所です。

もちろん都の北京も凄い所です。盛京のお城にはあまり驚かなかったのですが、北京城の巨きさには度肝を抜かれました。

ただ日本では、城というのは石垣に白い壁、何ともいえず気品があって美しい建物でございますが、この国のお城は違います。だいたい、城壁の中に街があるのですから変なものですが、その城壁がまた分厚く圧迫感があるのです。そういえば万里の長城もそうでしたが、こちらの都市づくり、国づくりは、「防衛」ということが基本なのでしょうか。

そんな北京に着くや、ウラたちはすぐに奉行所に連行されましたが、今度は特別な取り調べはございませんでした。「15名だな。よし」といった調子で、「宿を与えるから、ここで寝泊りをしろ」と言われたぐらいでございました。それから宿に案内されたのですが、石の家でした。多少破損していたようでございます。それを確認したお役人様が石工だか、大工だかを呼んで、すぐに修復してくれました。それから寝具、衣服、食糧をもらいました。

ウラたちは顔を見合わせました。盛京では、まさに喰いつなぐだけの粟、稗の出来合いの食事が配給され、まるで罪人でしたが、北京では立派な住民扱いのように感じたからです。

食材は、白米、麦粉、蕎麦粉、豚肉、鷺鳥、川魚、野菜、味噌、塩、茶、酒、などでした。賄いは、主として3艘の船の賄方である十蔵さん、蔵兵衛さん、次郎さんがやることになりました。もちろん一番若いウラも手伝いました。

鶏は偶にウラたちも食べますし、猪は山の者が食べていますが、鷺鳥や豚は見たことも、喰ったこともありませんでした。

もちろん米は炊きましたが、ウラたち海の者はあまり麦や蕎麦の粉を料理しません。兵右衛門様と与三郎様は大坂や京都の寺では麦粉や蕎麦粉を麺にして喰っていると教えてく

れましたが、作り方が分かりません。そこで十蔵さんたちが水を注して練って、千切って、味噌煮込みにしてくれましたので、何とか食べられました。

それにしても、この国の人たちの食い物、料理法、料理道具はかなり日本と違います。火は薪を燃やしますが、石炭というものを燃やすこともあります。道具は鉄鍋ですし、料理するときは油をよく使います。だいたい、満州人は煮物が多く、漢人は汁物が多いらしいですが、それにこの国の人、肉をよく食べます。料理の仕様は、豚、鳥、羊、牛などの獣を水で煮ます。魚はたまにしかありません。汁は醬や塩で味付けします。齋には水で煮て醤油を付けて食べます。味噌煮込みもありますが、その味噌の味は日本の味噌とはちがって、ウラたちの口には合いません。

そのうちに十蔵さんが「こんな材料ばかりじゃ嫌だ。作りたくない」と不平を言い出しました。蔵兵衛さんは「面白いじゃないか。色々な料理が試されて」というのですが、十蔵さんは「おれはやっぱり和え物や刺身をつくりたい」と溜息を吐くのです。次郎さんも「そうだな。何というても、米と魚が一番じゃよ」と相槌を打ちます。このとき、「いろいろな料理が試される」と言った蔵兵衛さんは、いつのまにか漢人の役人に麵の作り方を習ったようです。

それから、この国の酒は焼酎のようでした。粟で造るのだそうです。「漢人は米の酒も造っている」と酒好きの藤十郎さんが街で見たと言っていました。

街の外れまでを行くと、でかい豚を飼っている家もあります。

日本とこの国はまるっきり違います。それを思うと、食物というのはその国の土地で育った物を食べるというのが大原則だなという気がします。そして、それを大きくしたのが、「国」であり、そこに住む人が「民族」と呼ばれるものでしょう。

ついでですが、ウラが覚えた言葉を皆の衆にお教えしたもののの中から「食」に関する言葉だけ選べますと、こんな風でした。

日本語	手	口	腹	箸	椀
満州語	Gala	Anga	Dolo	—	Moro
漢語	—	—	—	Kuaiyzu	Wan

日本語	食	喰	飯を喰へ	さい	汁
満州語	Buda	—	Jefu	Yali	Shusihan
漢語	Fan	Chih	—	—	Tang

日本語	餅	豆腐	味噌	辛子	胡椒
満州語	—	Defu	Nisun	—	—
漢語	Po-Po	Tou-fu	—	Chieh-mo	Hu-Chiao

日本語	菜	菹	鶏	牛	酒
満州語	—	—	Coko	Ihon	Arki
漢語	Pai-tsai	Chou-tsai	Chi	—	Chiu

日本語	火	水	御馳走のお礼		
満州語	Tuwa	Muke	Baniha		
漢語	Huo	Shui	—		

ところで、ウラたちがいる北京城という街は、南側の外城(南北約 2km×東西約 7.8km)と北側の内城(南北約 5.3km×東西約 6.7km)からなっています。それを鼠色の城壁が囲っています。外城の正門は永定門、内城の正門を正陽門といいます。これらの門を通らないと街には入れないのです。その北京城の中に皇城(南北約 2.8km×東西約 2.4km)があります。皇城は朱色の塀がとり囲んでいます。正門は天安門。この皇城の内部に、また城壁にとり囲まれた紫禁城(南北約 960m×東西約 750m、敷地面積は 72 万 m²)があります。紫禁城の周りは濠に囲まれています。これは日本も同じです。全く違うのが屋根です。金色に輝いています。屋根の下の壁は美しい緑と青の模様が描かれています。正門は朱塗りの午門ですが、その高さには驚かされます。「紫禁城」という名前は、「紫」は皇帝様の色、「禁」は禁断の禁ですから、その中にウラたちは入れません。

ただ、執政王ドルゴン様には東華門外の普度寺に置かれたドルゴン様の別邸で面会させていただきました。ウラたちは緊張いたしました。なにせ日本でいえば將軍様にお会いするようなことでしょうか、無理ありません。ドルゴン様の風貌は、年齢 34、5 くらい、細く痩せていて、鷹のような鋭い目付をした方でしたが、精悍な感じをいただきました。

緊張したのはウラたちばかりではありません。満州人も漢人もみな、ドルゴン様の前に出ますときは非常に畏まっておられます。それは、このお方が今の清国をお作りになられ、そして万事の作法をお決めになられ、そしてこの方がおられるから国の治安が保たれていたからです。

それから、さっき「満州人、漢人」と申し上げましたが、この国にはもっと多くの民族がいました。モンゴル人などもいますし、髪が茶色の者もおりますし、目の玉に色が付いている者もおります。他にもいるのですが、よく分かりません。こんなに多くの民族が生活しているということも日本では考えられないことですが、たぶん満州人の清国が漢人の明国を攻略したからか、あるいは世界で一番の大国だから、こういうことになっているのだと思います。また、それだからこそ罪を犯していないとなれば、ウラたち日本人にもわりあい寛大なのでしょう。

1646 年の 1 月になりました。ウラたち 15 人は、とうとう北京で新年を迎えることになりました。まさか元旦を異国で過ごそうとは、思ってもいませんでした。皆は、日頃は口に出していませんでしたが、街で女の人や子供たちの姿を見ていると、日本に残した妻子のことを思い出すのでしょうか。庄吉さんなどが「どうしているかのう」と寂しそうに呟きます。孫十郎さんも「わしら日本に帰れるかの」と言うのですが、皆も同じことを思っております。

兵右衛門様は「そうだな。いずれ何とかせにゃいかんな」というような顔をして、その場を立ち去りました。

ウラは北京で仲好くなりましたドニと北京城内のあちこちを歩き廻りました。ドニは満

州人ですが、漢人の言葉も使います。『三国志演義』を読んで勉強したといます。歳はウラと同じぐらいですが、偉いものだと思います。

兵右衛門様も「やはり明朝を倒すぐらいの国民はちがうな」と感心していました。昔の漢人も偉かったと思います。日本人も漢人から多くのことを学んだはずでした。しかし、今の漢人は脆弱なところがあります。兵右衛門様がおっしゃるように、やはり国の盛衰というのは人力の盛衰なのでしょう。

前にも申しましたが、満州人は神を祀ります。神様は、釈迦牟尼仏、観世音菩薩、関聖帝君、ムリハン神(鉄砲1、対豚1対、馬2対の像)、画像神(7人の仙女の絵)、蒙古神(紅衣と緑衣で作られた2人の婦人像)です。それら神様に豚を供えるというのですから、ウラたち日本人には信じられません。

また清国では鵲が神の使いだとされています。昔々のこと、3人姉妹が長白山中の湖で水浴をしていたところ、鵲が飛んで来て、口に銜えていた赤い木の実を娘たちが脱いでいた衣服の上に落としました。それを知らずに末娘が呑み込んだところ、懐妊して児が生まれました。それがヌルハチ様の家系・アイシンギョロ家のご先祖だということです。

確かに鵲は盛京へ連行される山中で見かけました。鵲は鳥に似ていますが、鳥より小ぶりで、色は白黒です。物知りの与三郎様の話によれば、「日本には鵲は生息していないが、それでも古の歌人たちが鵲のことを歌っているのは渡来人から聞いた知識や、青鷺を鵲に見立てて謳っているのだ」そうです。ただし、九州佐賀藩の空にだけは鵲がいるそうですが、それは豊臣軍が朝鮮出兵したさきに連れて帰ったからだと言っておりました。



【 鵲 ☆ ほしひかる 絵 】

北京では、贅沢なことに働かないでも飯が食べました。行水もさせてくれました。少し気分が悪いと言えば医師が来てくれました。ただ北京城の外に出ることは禁じられていましたが、あとはだいたいにおいて自由に動いていました。時々、あちこちのお役人様からお呼びかかって、日本のことを話したり、小歌や謡を歌わせられました。そういう立派な芸事は兵右衛門様と与三郎様の出番でした。他の者は漁師の唄を歌いながら無茶苦茶に踊ったりしました。それが清国の人間にとって珍しかったのか、手を叩いて涙も流さんばかりに喜んでいました。

ドニはそういうお役人の息子でした。遠い国からやって来たウラたちに興味をもってドニの方から話しかけてきたのです。ドニはいい奴でしたが、甲高い声で叫ぶようにしてしゃべるのにはまいります。もすこし静かに話せないものかと思います。それから恥ずかし

いことですが、シンという女子の友だちもできました。最初はシンの目の玉が青かったのでウラはびっくりしましたが、ウラはよく柳の樹の下に坐って、ドニに満州の言葉を習い、シンからこの国の楽器の弾き方を教わりました。この国にはあちこちに大きな柳の樹がたくさん植わっているのです。

とにかく、ウラたちは城内を散歩したり、お役人様に会ったり、そんな毎日を過ごしていました。

「国にいるときは働きとうないと思うとったが、働くことがないのも何か辛いとう」と五兵衛さんが言いました。皆、苦笑いをしました。そういえば、皆さんは「働かざる者、喰うべからずだからな」などと冗談めいたことを言いながら、料理作りも手伝うし、家の掃除もよくやりました。

4月の末ごろのある日のことでした。兵右衛門様が「集まるように」と申されました。真剣な顔をされていたので、何か胸騒ぎがしました。

「実はの、昨日、いつものお役人に呼び出されての……」、兵右衛門様は一息つかれてから、続けられた。「わしらに、ずっとこの国に留まる気持はあるか、とおっしゃるのじや」。

ここからは大事な話ですので、皆の衆が言うたように話します。

先ず……、「それは誰が言うとするのじやろ」と首を傾げながら彦作さんが言うと、兵右衛門様が「上の上のお役人らしい」と応じました。

「ドルゴン様か」、「わからん」。

「おれは船以外の仕事はできん」、「皆、同じじや」と彦作さんと兵右衛門様。

ウラは、この国でシンのような満州人の嫁さんをもろうての生活を想像してみました。若い女には興味はもちますが、しかし豚肉ばかり喰うことを思うと、つい首を横に振ってしまいました。

そのとき、庄三郎さんが「断ったら、どうなる」と唸るような声で云ったのです。

市三郎さんが声を殺して言います。「わしら、殺されるのか！」

「……」。

「おいおい。殺されると決めるつけるなよ。それだったら、とっくに殺されているわい」。という長四郎さんの言葉を聞くと、皆の衆は、それはそうだという顔になりなりました。働かなくても食えるという楽な毎日であっても、ウラたちはいつも心の底に不安を抱えていたのです。だから長四郎さんの言葉に救いを求めようとしているのです。

そこへ市三郎さんがまた畳みかけました。「わしは、断ったら殺されるのか、と心配しておるのじや。兵右衛門様、感触はどうじや」。

「わからん。市三郎、異国人の腹を読むのは難しいぞ」。

「もっともじやの」。

でも、ウラは思いました。いろいろな民族の人間がいるこの国、日本人がいても気にしないのではないかと。

そのとき、兵右衛門様がウラの名を呼びました。

「卯助」。「へっ」。

「お前はとうじや」。

ウラは皆の衆と同じだと答えました。

「そうか。卯助でさえも帰りたいか。「へえ」。

「お前、まだ藤右衛門様の御遺髪はもっておろうの」。

「もちろんです」。

「御遺髪を竹内家にお届けしなければいかんしのう」。「はい」。

竹内家というのは若旦那様の後家さまのことです。後母堂さまはずいぶん前に亡くなられておりますので。

兵右衛門様は「まあ、今日は結論は出さずに、皆の衆はどうしたいかを考えてくれや」とおっしゃいましたが、御遺髪のことを申されたなら「日本に帰ろう」と呼びかけておられるのも同然だとウラは思いました。

翌日、また皆の衆が集まりました。

今日は、市三郎さんが口火を切りました。「兵右衛門様、与三郎様、それから皆の衆よ。日本へ帰ろうよ」。

「おれも帰りたい」。十蔵さんがすぐに応じますと、皆も深く頷きました。

腕を組んで聞いていた兵右衛門様は目を閉じたまま申されました。「この国に住むのが一番楽だぞ。帰ると云うたら、殺されるんかもしれん。仮にお許しが出たとしても、また難破して日本に無事に戻れるとは限らん。たとえ日本の土を踏んでも、今度は日本のお役人様が許してくれるかどうか分かんらん」。

「そうだったな」。十蔵さんが涙ぐみながらポツンと言った。

そうでした。大風に遭遇しての漂流だとはいえ、ウラたちは国外へ出た身、御法度を破った身でした。日本の船乗りなら、鎖国を破った者は死罪ということを知っていました。

皆、口を噤んでしまいました。

そこへ兵右衛門様が静かに、しかし力強く申されました。「解った。どうせ何をやっても死ぬ身なら、日本の土を踏むように努めたいと皆の衆は云うのじゃな」。

「へい」。皆の衆は一斉に頭を下げました。

1645年5月5日、兵右衛門様は清国の奉行所の役人に帰国願いを出されました。「5月5日」にしたのは、面倒を見てくれているドニの父親が「縁起のいい日がいい」と教えてくれたからです。

それからというものウラたちはへたなことをやらさないように心がけながら、毎日をおくりました。もし何か事件にでもなったら、帰国願いどころではなくなるからです。

しかし、許可は仲秋節が過ぎてもまだ下りません。時々、兵右衛門様と与三郎様は、何事かを話しておられました。漏れ聞こえたところによりますと、清国は朝鮮国を威圧する道具として日本人のウラたちを使っているとか何とか、話されておりましたが、ウラには何の話かサッパリ分かりませんでした。

ただ、明国が清国に滅ぼされるという現実、それにウラのような子供はよく知らないのですが、およそ50年昔、日本の豊臣軍は朝鮮・明軍を相手に朝鮮半島で戦争をしたということです。しかも明国が傾いたのはその戦費のためだとも言われているのです。清国と朝鮮国、朝鮮国と日本国、国と国の関係は難しいものだという事ぐらいは何となく解りまし

た。

「だからこそ、ウラたち漂流者は、事と次第によって白にでも、黒にでもなるのですね。」と兵右衛門様に申し上げますと、兵右衛門様は目を丸くされ「余計なことを申すな、痴れ者！」と厳しく叱責されました。

そうこうしてうちに5ヶ月が経ったころ、やっと待望の許可が下りたのです。ウラたちは抱き合って喜びました。こんなに晴々とした気持になったのは漂流以来初めてのことでした。

振り返れば、ウラたちはほぼ1年を北京で過ごしたのです。与三郎様は「おれもあちこち行ったけれど、北京は第二の故郷のように思えてくるな」と感慨深げでした。それはそうです。船乗りはこんなに長期滞在することはありませんから。ただ、そんな喜びに浸ることができても、出発の日がまだ決まりません。

兵右衛門様は両腕を組み、思案することが多くなりました。そんなとき突然に北京出発は1645年11月11日という知らせがまいりました。それから慌ただしく、冬の長旅の準備を始めました。ドニの父親が酒肴を持って駆けつけて来ました。「別れの盃」だというわけです。ドニが「卯助は日本へ行ってしまうのか」と言いましたが、その声がいつもより低くかったので、却って友との別離の寂しさが胸に走りました。

出発の日には長い行列ができました。行列は清国の、朝鮮国への使いでした。

「やはり、われわれはついでに届けられるようですな」と与三郎様が兵右衛門様に云っておられました。

後で知りましたが、ドルゴン様は皇帝の名義で、朝鮮の国王に「一行の日本帰国を助けよ」という勅諭を送ったのだそうです。これも朝鮮国への圧力のひとつなのでしょう。だとすれば、ウラたちが生かされていたのはそのためだったとも考えられますが、まあそれでもええなのでしょう。

北京城の門を出るとき、シンが奏でる胡琴が聞こえてきました。それは胸に迫るような寂しい音楽でした。ウラはシンを目で探しましたが、その姿は見当たりませんでした。

1645年の11/11に北京を出発した行列は12/28に京城、1/28釜山を経て、ついに3/17日本国の対馬、1646年の6/16には大阪、そしてとうとう故郷の越前へと帰還したのでございます。

帰るまで半年かかったわけですが、この間の朝鮮や対馬の役人の態度で、ウラたちが危険な厄介者だということが、よく分かりました。

国と国の外交は難しいものがあります。その上、日本は鎖国政策。国外へ出た者は、理由は問わず死罪。幕府の判断が罪人なら対馬の判断も同じでなければならぬ。しかし現実目前にいる者は自らの意志で国外へ脱したわけではなく大風のための漂流民。一層のこと、遭難して死んでしまっておればよかったものを、生憎ウラたちは生きている。面倒な奴らがやって来たというわけです。

そういう日本の国法を知っている朝鮮国はもっとやりづらい。清国が届ければいいものを朝鮮国へ「一行の日本帰国を助けよ」と命じてくる。問題含みの日本人など引き受けたくない。火種の元になる。そんな迷惑のお蔭で釜山滞留50日、対馬は70日の足踏みでし

た。

☆母国日本

それでも、ウラたち 15 名はやっとやっと越前三国に帰り着きました。三国湊は上へ下への大騒ぎとなりました。

先ず、皆の衆は揃って、船問屋の鶴屋様にこの度の一件のお詫びとご報告にうかがいました。恐らく鶴屋様はあまりいい感情をおもちではなかったことと思います。鶴屋の旦那にしてみれば、ウラたちより、船が戻ってきてほしいところですから、無理ありません。それからウラたちは竹内藤蔵家の若奥様に大旦那様の御遺髪をお届けし、さらにはお役所にもご報告に行きました。それから村の長の所にも顔を出したりで、暫くは一ぷくする暇もないくらい忙しい日々でした。

村の者もお役人様も、口では「よかった、よかった。よう戻って来た」と言ってくれましたが、死んだものと思っていた連中が生きて帰ったはよかったが、禁じられている異国で3年も生活していたとは！ と内心複雑な思いをしているのです。そうです。ウラたちは幽霊のようなものでした。中には陰で、「肉ばっかり食っていたそうな」「どうりで、えれえ臭いと思った」と陰口をたたく年寄衆もおりました。

そんなとき兵右衛門様は丸岡城の2代目藩主である**本多淡路守重能**様の元へ足繁く通われていたのでございます。福井藩4代目藩主の**松平光通**様はまだ10歳でございましたので、越前国の実力者である淡路守様にご相談申し上げようというわけでした。

そうしたお二方の話し合いも一段落したのでしょうか、兵右衛門様が皆の衆を集めてこう言われました。

「わしと与三郎は江戸の奉行所に出頭しなければあかんが、二人はもう三国にはもう帰って来んつもりじゃ。異国の地で無念の最期を迎えた者たちに比べれば、わしらは命があるだけで幸せというものじゃ。それにわしらは人様の一生分以上の体験をしてきた。それ故に、このまま三国で暮らせば、鶴屋さんや遺族の者たちと顔合わせることになり、申し訳が立たん。皆も同じように、三国には住みにくいと感じていると思う。そこでじゃ、江戸での取り調べが終わったら、わしは大坂へ行く。そこで商いを始めようかと思うておる。大坂へ行ったら皆の衆に連絡をするから、わしの所へ来いや。わしが面倒を見てやる。もっとも、どうするかは自分で決めればええことじゃ。皆の衆は、一人でも、何処でも、生きていく自信はもっておるじゃろう」。

「兵右衛門様、おれたちは死罪にはならんというのか」。

「分からん。たとえお許しをいただいたとしても、わしらは三国には住めんから、こういう考え方もどうじゃと言うておる」。

そう言い残して、兵右衛門様と与三郎様は江戸へ行かれ、そして三か月後に約束通り大坂から手紙が来ました。皆の衆は家族の者を伴って大坂へと旅立って行きました。

ウラですか？ ウラは兵右衛門様が江戸に発つ前に「本多淡路守様の所へ行け」と言われたのでございます。で、参りますと「お前が痴れ者の卯助か？」と言って高笑いされました。「は？」という具合で、まったく訳が分かりませんでした。

後日うかがえば、当時の幕府はウラたちの処置に困っていたそうです。ウラたちはただ

の漁船ではなく商船でしたから、禁じられている輸出入を疑われているわけです。しかし戻って来たのは身一つ、そこに漂流の真実味があるからこそ、「許さない」の鉄則をどう判断すればいいかを思案されていたわけです。そこへ福井藩が「不憫ゆえに何とか穏便に」との願いを出したのです。「ならば」というわけで、幕府は極刑にしない代わりに、「許さない」の程度をどのくらいにするかと模索していたのです。

兵右衛門様は対馬の役人の態度から、事がそう展開するだろうことを読んでおられ、越前に帰るや、実力者の淡路守様にお会いし、「わしらは三国には住まないし、二度と戻らないから、皆を許してほしい。何だったら、自分の首を差し出してもいい。その代わり皆の衆の命は助けてほしい」と申し出ておられたそうです。淡路守様は了承し、その旨を江戸へ願い出ておられたのでした。いわば越前、江戸の所払いを自ら願い出たというところでしょうか。江戸のお役人様も落とし所を提示されて、ホッとなさったと聞いております。

そうそう、「痴れ者」の話はまだしておりませんでした。兵右衛門様は「まだ少年の卯助は、この度の騒動から外してくれ」と頼まれたというのです。

この度の話し合いを通して淡路守様は、兵右衛門様のことを「異国を漂流し、苦勞しただけあって、たいした男だ」と感心されておられましたから、「じゃ、卯助とかいう子供は最初からいなかったことにするか」とアッサリと了解なさいました。

すると、兵右衛門様は「一層のこと、淡路守様の手元に置かれたらいかがでございましょうか。あの者は変わり者というか、一種の痴れ者でございまして……」と、ウラが満州語や漢語を話すようになったこと、異国の人間とすぐ仲好くなること、いつもあれこれやくだらない事を考えていることなどを縷々話されたというのです。

それで「お前が痴れ者か。痴れ者は放っておくわけにはいかぬ。手元に置いておこう」ということになったわけでございます。お蔭さまで、ウラは淡路守様に拾われ、後にはお侍にしてもらったのでございます。村の者はウラのことを出世頭と言いますが、そんなことはございません。

本当にお偉いのは、淡路守様と兵右衛門様でございます。

淡路守様は「漂流民の国田兵右衛門ではまずかろうから、大坂で名前でも変えて一旗揚げろ。お主ならできるじゃろう」と兵右衛門様に申されたそうです。

名前といえば、ウラも新しい名前を頂戴したのでございます。エッ、今のウラの名前ですか？ それは言わぬが花でございましょう。

そんなことから、ウラは兵右衛門様、淡路守様に頭が上がらないのでございます。お二方こそ、男の中の男だと思います。

それから、たいしたお方といえば、若旦那様の奥様もそうでございます。わずか5歳の幼い藤太郎様を抱えながらも死にもの狂いで商いに励まれ、ついには竹内藤右衛門、藤蔵様の御遺志を継いで三国湊で船問屋を始められたのでございます。もちろん藤太郎様は竹内家の3代目として立派に成長されました。

そういえば、清国のドルゴン様は、あれからも広い山野を次々と征服し、南京、広州、長沙、四川を領土にされたそうです。しかしながら、まことに残念なことに1651年に亡くなられたらしいのです。清国の事実上の3代目としてあの広い黄土を疾駆された無敵のドルゴン様が、と思うと信じられません。しかし、世紀の英雄と直接お話したことを思い出

す度に、ウラは今でも身が引き締まります。

それから、満州人の若者ドニはどうしているのでしょうか。もしかしたら立派な役人になっているのかもしれませんが。

そして音曲が好きだったシンは今ごろどうしているのでしょうか。

こうして時折、北京の紫禁城などを思い出したりするのですが……、ウラにとりましては、もう今は、ただただ遠い夢のようでございます。

参考：国田兵右衛門・宇野与三郎口述『韃靼漂流記』（東洋文庫）、井上祐美子『海東青 — 撰生王 ドルゴン』（中公文庫）、『孫子』（岩波文庫）、井上祐美子『紅顔』（中公文庫）、「円円曲」（中国詩人選集二集 12『呉偉業』岩波書店）、姚雪垠『叛旗 — 小説 李自成』、寺田隆信『紫禁城史話』（中公新書）、岡田英光・神田信夫・松村潤『紫禁城の栄光』（講談社学術文庫）、袁枚著『随園食単』（岩波文庫）、ジョンストン『紫禁城の黄昏』（岩波文庫）、『ラストエンペラー』（ベルナルド・ベルトリッチ監督）、『蒼穹の昴』（NHK-TV）、竹内実『北京』（文芸春秋）、村松伸『北京』（河出書房新社）、井上靖『蒼き狼』（新潮文庫）、「孫文と梅屋庄吉」（東京国立博物館）、『毛沢東語録』（角川文庫）、『実践論・矛盾論』（角川文庫）